

子どもの「生きる力」と学校内での遊び方の関連

伊 勢 慎* ・ 大久保 淳 子**
櫻 井 国 芳** ・ 池 田 孝 博***

要旨 子どもの「生きる力」と遊び方の関連を検討するため、小学5、6年生199名を対象に、IKR評定用紙および遊び場所、遊び相手、遊び人数および遊び内容に関する質問紙調査を実施した。主成分分析に基づく「生きる力」の合成変数と遊び方の関連を、重回帰分析を用いて検討した。結果は以下のとおりである。子どもの遊び方の実態は、グラウンド、同じ年、4～7人、ボール遊びやおしゃべりが多い。「生きる力」は、心理的・社会的能力の現実肯定が男子と女子に共通して高く、心理的・社会的な高能力の視野・判断と身体的能力の野外生活・技能は男女に共通して低い。「生きる力」の性差では、女子の徳育的能力が高く、男子は身体的能力が高い。また、心理的・社会的能力に性差は認められない。「生きる力」と遊び方の関連では、人間関係を構築でき、身体を使って遊ぶような内容は「生きる力」の高さと関連する。

キーワード 児童 / elementary school aged children、生きる力 / powers for living、遊び / plays

緒言

現行の幼稚園教育要領や学習指導要領の基本的な考え方は、教育の理念を踏まえて「生きる力」を育成することや、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること、道徳教育や体育などの充実により、豊かな心や健やかな体を育成することを掲げている。この中でも特に「生きる力」については、平成8年の中央教育審議会（以下、中教

審）答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の中で「いかに社会が変化しようとして、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力」という概念が示され、これらを「ゆとり」の中ではぐくむとされた（中教審、1996）。平成10年における学習指導要領（14年度より実

*福岡県立大学人間社会学部・講師

**福岡県立大学人間社会学部・准教授

***福岡県立大学人間社会学部・教授

施)の改訂は、この答申を受けて「生きる力」を培うことの基本的なねらいが示された。さらに、平成15年の中教審答申「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」では、「生きる力」は、豊かな人間性、健康・体力という従来の方考え方を踏まえつつ、知の側面として「確かな学力」が明記された(中教審、2003)。平成20年に改訂された現行の学習指導要領では、「ゆとり」でも「詰め込み」でもなく、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力などの育成を重視して、次代を担う子どもたちが社会において必要となる「生きる力」を身に付けさせることが目指されている。加えて、現行の幼稚園教育要領解説では、「幼児の生活や遊びといった直接的・具体的な体験を通して、人とのかかわる力や思考力、感性や表現する力などをはぐくみ、人間として、社会とかかわる人として生きていくための基礎を培うことが大切である」と述べられており、幼児教育は、その後の就学後の「生きる力の基礎」の獲得が目指されている。ちなみに現在、文部科学省中央教育審議会幼児教育部会では幼稚園教育要領の改訂作業が行われており、「動機付け、粘り強さ、自制心といった非認知的能力を身に付けること」や、「多様な運動経験等」がその後の生活に大きな影響を与えるとして、今後、幼児教育において育みたい資質・能力を整理し、健康な心と体、自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、数量・図形、文字等への関心、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現の10項目が示されている。このようにその時代において直面する社会情勢に応じて、子どもたちには、その社会で生きていくための、多様な、また新た

な能力が求められるが、現行の学習指導要領の中で、これまで求められていた「生きる力」は現実的にどのような活動の中で、育まれてきたのかについては、明確に検討する必要があると思われる。

ところで、「生きる力」の評価尺度については、橘ほか(2003)によって作成されたIKR評定用紙があり、これを用いて様々な教育プログラムに関する「生きる力」の育成効果が検証されている。たとえば、自然体験としてのキャンプ(橘ほか、2003; 神田・佐藤、2012)自然学校(関田ほか、2013)、ボート体験(Peng et al., 2016)、臨海学習(矢野・三村、2010)に関する研究がある。また、教科に関しては、数学(富田・黒木、2009)や体育(仲山ほか、2010)、さらに教科外では、特別活動(大橋、2006)において「生きる力」の育成を意図した取り組みがあり、その効果が検討されている。その他にも、大学生の野外活動を対象とした研究(橘ほか、2003)や「生きる力」を育むための教員育成に関する課題についての言及もある(塩川・池谷、2010)。これらはいずれも「生きる力」の育成を意図した教育プログラムについて検討されたものである。しかしながら、「生きる力」は学校だけで育むのではなく、家庭や地域など社会全体で取り組むこと(文部科学省、2010)や、学校の内外を問わずその教育活動全体を通じて育むこと(中教審、2003)も重要であるとされている。このような観点で、矢野(2006)は夏休みの過ごし方と「生きる力」の向上の関連を検討しているが、明確な結論を得るには至っていない。学校内の活動には、教師が関わる教育活動のみでなく、休み時間などにおける友人との遊びの時間も含まれる。しかしながら、「生きる力」と遊びの関連について

言及した研究は見られない。子どもにとっての遊びは、ピアジェ（1976）の「楽しく遊ぶために一人ひとりが自分なりに考え行動することが、子どもの思いやりや協調性をそだてていくことにつながる」という言葉を引くまでもなく、多くの研究者によってその意義が論じられている。他方、「生きる力」には、「自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力」などが求められているが、子どもの遊びはまさに、主体的に考え、行動したり、自分を律して他人と協調したり、他人を思いやる活動であるとともに、内容によっては健康や体力の向上に寄与する活動である。つまり、子どもの遊び方は、「生きる力」の育ちに大きく関わっていると思われる。

そこで本研究では、児童期後期の子どもたちの学校内での遊び方と「生きる力」の関連について検討することを目的とする。

方法

1. 標本数

本研究の対象者は、F県内の小学生5、6年生199名で、性別の内訳は、男子115名、女子84名であった。調査は無記名で行われ、得られたデータは本研究の目的以外に使用しないこと、回答内容によって対象者に不利益が生じないことなどを口頭及び書面で説明し、同意が得られたもののみを分析対象とした。

2. 調査項目

「生きる力」の調査には、橘ほか（2003）に

よって作成された「IKR 評定用紙」を用いた。「IKR 評定用紙」は、「生きる力」を「心理的・社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の3つの能力で構成されるとし、それぞれの能力に、「非依存」「積極性」「明朗性」「交友・強調」「現実肯定」「視野・判断」「適応行動」（以上、心理的・社会的能力）「自己規制」「自然への関心」「まじめ勤勉」「思いやり」（以上、徳育的能力）「日常的行動」「身体的耐性」「野外生活・技能」（以上、身体的能力）の14の下位指標が示されている。さらに、14の下位指標についてそれぞれ5つの質問項目が設定され、合計70の質問項目で構成される。対象となった児童は、それぞれの項目に対して「とてもよくあてはまる（6点）」から「まったくあてはまらない（1点）」の6段階で回答した。

遊びの実態については、遊びの場所として、グラウンド、教室、中庭および図書室などの特別室を設定した。また、遊び相手として、同じ学年の友だち、年下の友だち、先生を挙げて回答を求めた。さらに、遊ぶ際の人数は、1人、2～3人、4～7人、8人以上とし、遊ぶ内容として、鬼ごっこ、本を読む、遊具であそぶ、お絵かき・工作、ボール遊び、一輪車、なわとびやゴムとび、砂場で遊ぶ、友達とおしゃべりの9種類を設定した。回答は、「よく遊ぶ」「ときどき遊ぶ」「あまり遊ばない」「全然遊ばない」の4段階とした。

3. 統計処理

「生きる力」に関しては、合成変数を求めるために70項目の主成分分析を適用した。「生きる力」と遊び方の関連では、主成分分析によって得られた第1主成分の主成分スコアを従属変数として、遊びの場所（4項目）、遊び相手（3

項目)、人数(4項目)、遊びの種類(9項目)それぞれを独立変数とする回帰式を求める、重回帰分析を適用した。なお、本研究における有意確率は5%水準とした。

結果及び考察

1. 遊び方の基礎統計

5、6年生の児童の校内での遊びの実態については図1に示すとおりである。遊び場所として「よく遊ぶ」が選択されたのは、グラウンド(42.9%)や教室(27.2%)、特別教室(23.7%)である。遊び相手は同じ年が多く(85.9%)で、先生と遊んでいる児童(0.5%)はほとんど見られなかった。遊び人数は4~7人(39.8%)が最も多く、次いで2~3人(29.4%)であった。遊び内容については、ボール遊び(39.2%)やおしゃべり(35.2%)が多く、一輪車(0.5%)や縄跳び・ゴム跳び(0.5%)は少なかった。

2. 「生きる力」と性差

IKR評定用紙の70項目に基づく、14の下位指標の男女別スコア(5項目の平均値)を算出し、その性差についてt検定を用いて検討した。結果を図2に示している。

男子児童において、大きい値を示したのは、

明朗性(4.50)、現実肯定(4.68)、身体的耐性(4.65)であり、逆に小さい値を示したのは、視野・判断(3.82)、野外生活・技能(3.86)であった。一方、女子では、現実肯定(4.71)、まじめ勤勉(4.70)、思いやり(4.59)が高く、視野・判断(3.90)、日常的行動力(3.57)、野外生活・技能(3.74)が低かった。男女で共通して高いのは、現実肯定であり、共通して低いのは、視野・判断、野外生活・技能であった。

性差については、徳育的能力の自己規制($t_0 = -2.270$, $df = 197$)、まじめ勤勉($t_0 = -3.268$, $df = 197$)、思いやり($t_0 = -2.775$, $df = 197$)において女子が高く、身体的能力の日常的行動力($t_0 = 4.321$, $df = 197$)、身体的耐性($t_0 = 2.109$, $df = 196$)において男子が高かった。しかしながら、心理的・社会的能力に性差は認められなかった。

3. 「生きる力」と遊び方の関連

「生きる力」の合成変数を作成するため、70項目の因子分析を適用して検討したが、解釈可能な因子は抽出されなかった。そこで、主成分分析を適用した結果、図3に示すように第1主成分の固有値(16.8)は第2主成分(4.0)以下を大きく上回る結果となった。また、70項目中59項目において、第1主成分の主成分負荷量

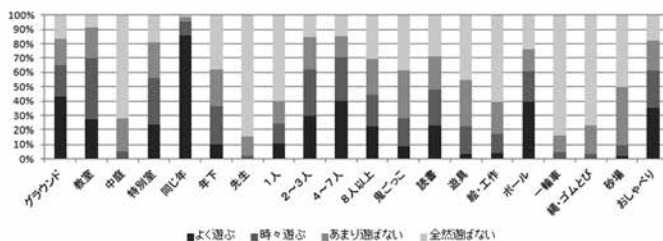


図1 遊びの実態

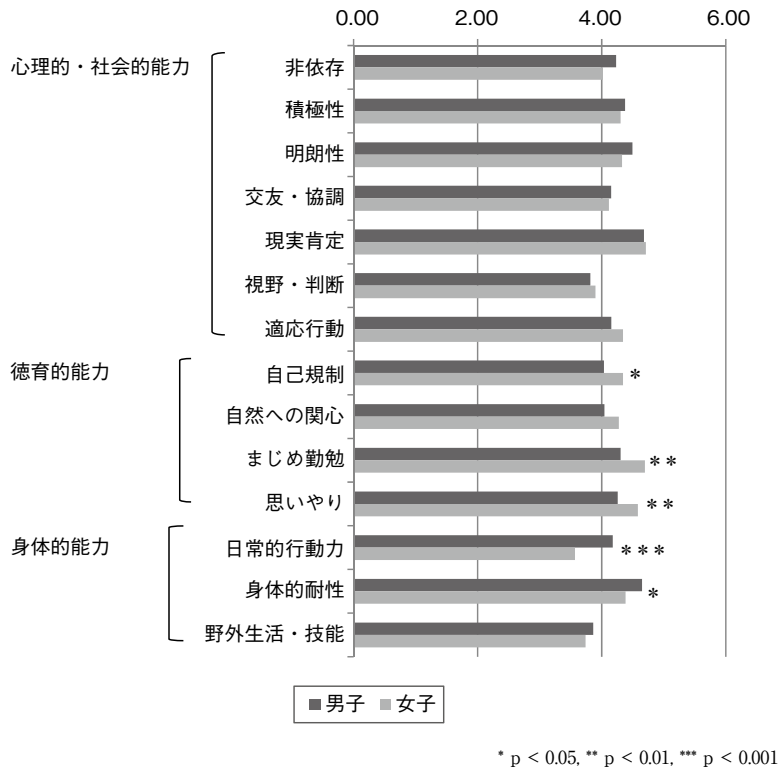


図2 「生きる力」因子の性差（t検定）

が、0.3以上を示した。つまり、本研究のデータでは、「生きる力」は1つの合成変数で説明できると思われる。

そこで、「生きる力」の主成分スコアを用いて遊び方との関連を、遊び場所、遊び相手、遊び人数、遊び内容別に変数減少法による重回帰分析を用いて検討した。結果を表1～表4に示している。

「生きる力」と遊び場所の関連（表1）では、最終的に選択された独立変数は、グラウンドであったが、有意な関連は示されなかった ($t_0 = 1.681, p = .095$)。遊び相手（表2）については、同じ年が有意な関連を示し ($t_0 = 2.321, p < .05$)、同じ年と遊んでいる子どもの「生きる力」が高いことが示された。「生きる力」と遊

び人数（表3）の関連では、1人で遊んでいる子どもの「生きる力」が低いことを示し ($t_0 = -2.386, p < .05$)、表4の遊び内容では、ボール遊び ($t_0 = 2.094, p < .05$) や縄跳び・ゴム跳び ($t_0 = 2.228, p < .05$) で遊んでいる子どもの「生きる力」が高かった。同級生との人間関係をうまく構築し、1人遊びにならないことや、ボールや縄跳び・ゴム跳び等、身体を使って遊ぶことは、「生きる力」の高さに関わっていることが窺える。このことは、対象の児童期後期の子どもたちが、その年齢になるまでボール遊び等の遊びの積み重ねがあったことも「生きる力」に繋がっていたのではないかと考える。一人では遊びが広がらず、複数人での遊びの意義に加え、使用する道具の遊び集団での工

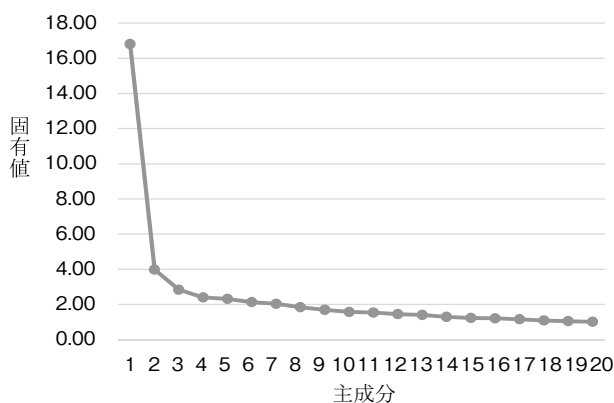


図3 主成分分析の固有値

夫の意義を示唆している。この背景には、幼児期からの集団、異年齢での遊びを積み重ねるといふ経験があり、幼小の一貫した「生きる力」を目指した指導の方向性の検討への示唆を与えるものとする。そして、今後の学習指導要領の改定で明らかとなる新しい学力観への移行時

にも本研究で示した結果は、1つの研究の方向性を示すものである。

表1 「生きる力」と遊び場所

R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差			
.141	.020	.013	1.004945			
回帰	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率	
	2.853	1	2.853	2.825	.095	
残差	140.378	139	1.010			
合計	143.231	140				
従属変数	標準化されていない係数		標準化係数		t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ			
グラウンド	.295	.175	.141	1.681	.095	

表2 「生きる力」と遊び相手

R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差			
.193	.037	.030	1.000265			
		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
回帰		5.392	1	5.392	5.389	.022
残差		139.074	139	1.001		
合計		144.465	140			
従属変数	標準化されていない係数		標準化係数		t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ			
同じ年	.900	.388	.193		2.321	.022

表3 「生きる力」と遊び人数

R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差			
.199	.040	.033	.987593			
		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
回帰		5.551	1	5.551	5.691	.018
残差		134.597	138	.975		
合計		140.148	139			
従属変数	標準化されていない係数		標準化係数		t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ			
1人	-.464	.195	-.199		-2.386	.018

表4 「生きる力」と遊び内容

R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差			
.349	.122	.096	.963267			
		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
回帰		17.381	4	4.345	4.683	.001
残差		125.264	135	.928		
合計		142.645	139			
従属変数	標準化されていない係数		標準化係数		t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ			
ボール	.353	.169	.172		2.094	.038
縄・ゴムとび	1.030	.462	.189		2.228	.028

謝辞

本研究は、平成28年度福岡県立大学研究奨励交付金（附属研究所重点領域研究：研究課題名「田川・筑豊地区における地域教育課題の抽出と運動経験や道徳・規範意識の芽生えを意図した教材開発および保育者教育」）の助成を受けて実施された。また、研究に協力いただいた田

川市内の小学校の先生方、児童の皆さんおよび田川市教育委員会に心より感謝申し上げます。

参考文献

中央教育審議会（1996）21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）。文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_

- chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309579.htm
 中央教育審議会（2003）初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について（答申）。文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/f_03100701.htm
- 中央教育審議会（2008）幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）。文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1216828.htm
- 神田亮・佐藤健（2012）児童の組織キャンプにおけるMHPC尺度とIKR尺度の変容。別府大学短期大学部紀要 31：125-131。
 文部科学省（2010）現行学習指導要領・生きる力（保護者用パンフレット）
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/pamphlet/_icsFiles/afldfile/2011/07/26/1234786_1.pdf
- 文部科学省（2008）幼稚園教育要領解説。フレーベル館
 仲山正志・西川啓子・北川隆（2010）体育学習により培うことの出来る「生きる力」の検証についての考察。京都女子大学発達教育学部紀要 6：109-119。
 大橋順子（2006）豊かなかわりを通して、ともに生きる力の基礎をはぐくむ特別活動：子どもの社会性を育む学級活動の実践。創大教育研究 15：62-69。
 大塚恵理子（2013）国際バカロレア・ディプロマプログラム科目「知識の理論（TOK）」と総合的な学習の時間（言語における美の表現）。電子情報通信学会技術研究報告。TL、思考と言語 112（442）：7-12。
 Peng, C., Yamashita, K., Furusho, M., Kobayashi, E. (2016) Effects of Cutter Boat Experience on Adolescents Abilities. Transactions of Navigation 1 (1): 1-7.
 ピアジェ, J.; 大友茂訳 (1976) 遊びの心理学。黎明書房。
 関田貴史・畑裕介・畦浩二（2013）兵庫県自然学校のプログラムタイプが児童の生きる力に及ぼす影響：生きる力を構成する下位尺度の相関関係に注目して。大阪教育大学紀要。第4部門 教育科学 61（2）：41-50。
 塩川達大・池谷尚剛（2010）「生きる力」を育む教員の資質向上施策について。岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 59（1）：293-301。
 橘直隆・平野直直・関根章文（2003）長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響。野外教育研究 6（2）：1-12。
 橘直隆・蓬田高正・土方圭（2003）野外運動の授業が学生の生きる力に及ぼす影響。大学体育研究 25：19-29。
 富田卓之・黒木哲徳（2009）数学的活動のための授業プラン：新学習指導要領をみすえた授業展開のために。福井大学教育実践研究 33：77-84。
 矢野正（2006）夏休みの過ごし方によって児童の「生きる力」の向上に違いはあるか。大阪教育大学実践学校教育研究 8・9（合併）：69-82。
 矢野正・三村寛一（2010）小学校における安全な臨海学舎の実践研究（V）：児童の生きる力に及ぼす影響。大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学 58（2）：151-160。